

氏名（本籍）	高波 幸代（茨城県）
学位の種類	博士（言語学）
学位記番号	博乙第2698号
学位授与年月日	平成26年7月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	A Comparison of Spelling Test Formats Among Japanese EFL Learners for Diagnostic Purposes

主査	筑波大学 教授	久保田 章
副査	筑波大学 教授	磐崎 弘貞
副査	筑波大学 教授	博士（言語学） 卯城 祐司
副査	茨城大学教育学部 准教授	PhD（外国語・第二言語教育） 齋藤 英敏

論文の要旨

本研究は、日本人英語学習者の英語のスペリング能力の習得について調査し、スペリングの知識や能力を測定するためにどのような課題が有効か検証することによって、最終的に学習者のスペリング能力の診断テスト開発に寄与することを目的としている。

そのために、まずスペリングの能力（知識）とそれに関連する語彙知識を詳細に測定するための課題を開発する理論的な枠組みとして、「音（発音）」、「文字（綴り）」、「意味（理解）」の3要素を取り上げ、各要素を組み合わせることによって複数の課題を作成し、それぞれの有効性について検証を行った。また、複数のテストや課題を比較分析することによって、スペリング能力と関係する語彙知識に関して、日本人学習者にとって比較的習得が容易な側面と反対に習得が困難な側面、さらには学習者に不足している知識などの特定を試みている。

分析方法としては、課題の得点間に見られる関係や差などについての統計的な量的分析に加え、Hatch & Lazaraton(1991)の含意尺度法 (Implicational Scaling) の手法を用いて、質的な観点から課題間に難易度の特徴が見られるかどうか考察している。

本論文は全8章で構成され、以下の5つの調査が含まれている。調査1では、先行研究で用いられていた Timed Dictation などの課題（テスト）に著者自身が作成した Matching Task を加えた5種類の課題を用い、高校生78名を対象にして、スペリング能力の習得状況の分析と課題の難易度について検証した。調査2では、さらに L2 to L1 Translation Task を加えた6種類の課題について大学生95名を対象として同様の検証を行うとともに、学習者の語彙知識の広さ（語彙サイズ）との関係について分析を行った。調査1および2の結果として、単語の意味の理解、スペリングの再認能力、スペリングの再生能力は一致せず、全体として「聞き取った音声をもとに単語の綴りを書く課題（再生課題）」は「選択肢の中から正しい綴りを選んだり、単語の綴りから日本語の意味を選ぶ課題（再認課題）」より難しいことが示された。調査2では、さらにテスト間の階層性の存在の可能性や、テスト結果に関する学習

者の語彙サイズの影響が示唆された。

調査1と2で取り上げた課題は先行研究で提案されたものが中心であり、体系的に構成されているわけではなく、さらにそれらには、文法能力などスペリング能力との関係が希薄なものも含まれる懸念があった。そのため調査3～5では、スペリング能力とより深く関わる語彙知識の課題を著者が独自に作成して調査を実施した。具体的には、単語の音、文字、意味という3つの要素について、それぞれを「音→文字（音を聞いて文字を特定できる）」、「文字→意味（文字を見て意味がわかる）」のような6通りの関係性でとらえ、さらにそれらの組合せを再生課題と再認課題として設定して、計12種類の課題を開発した。

調査3では、大学生94名を対象に、35語の単語についてスペリングに関する再認課題と再生課題（各6題）の比較を行うとともに、含意尺度法によってスペリングの習得の階層性について考察した。同様に調査4では、調査3で扱わなかった音素やいわゆる黙字も考慮して新たに32語の単語について12種類の課題を設定し、大学生57名を対象とした調査が行われた。調査5では、調査3と4において信頼性が比較的低かった課題をはずすなどの調整を行い、10種類の課題（再認課題6種、再生課題4種）を用いて、以前の調査で扱われていなかった音素を含めた33語について、大学生34名に対して調査を実施した。3つの調査で扱われた計100語の単語は、高等学校の英語検定教科書において頻度の高いものから選出されており、これによって調査全体として基本的な母音や子音をほぼ網羅することができたとされている。

以上の調査の結果、まず、再認課題の場合は課題の違いによる難易度への影響が見られなかったのに対し、再生課題の場合は課題の難易度に対する影響が明らかになった。また、含意尺度法を用いた分析により課題の難易度にどのような傾向が見られるか検証した結果、再認課題では学習者の語彙サイズによる影響は見られず、課題の階層性も明確ではないことがわかった。再生課題においては、約半数の課題について階層性が認められることが示され、さらには、語彙サイズが2500語未満の学習者の場合には、課題の難易度は課題の種類や特徴に影響を受けやすいこと、一方で語彙サイズが2500語以上の学習者の場合には、総体的に課題の違いによる影響を受けにくいことも判明した。これらに基づき、教育的示唆として、スペリングの診断テストを実施する際には学習者の語彙サイズを考慮して適切な課題を選択することなどを提案している。

審 査 の 要 旨

英語のスペリング能力の習得に関する研究では、英語を母語とする幼児や子供に関するものが中心であり、第二言語学習者、特に日本人英語学習者を対象とする体系的な研究はほとんどない状況にある。また、先行研究では、英語の綴りや音素が一部しか扱われていないとか、あるいは、語彙知識の中の特定の側面に注目して、再生課題のみ、または再認課題のみを用いて受容知識と発表知識の比較が行われるなど、部分的、限定的な調査・分析に留まってきたと言える。

本研究は、そのような問題意識に基づいて行われた体系的、総合的、実証的な研究であり、日本人英語学習者のスペリングの習得上の困難点を明らかにし、将来的に日本人学習者のためのスペリング能力の診断テストの開発に寄与することを目指しており、その研究成果は今後の英語教育に大きく貢献することが期待される。

本論文の主な特長としては、第一に、スペリング能力と語彙知識の関連性について研究するための方法論的な枠組みを考案した点をあげることができる。Nation (2001)の語彙知識の概念を参考に、単語

の記号体系としての構成要素に着目して「音（発音）」「文字（綴り）」「意味（理解）」の3つを抽出し、それぞれの構成要素について学習者の理解を測定する方法として (1)音→文字, (2)音→意味などの6つの側面を特定した点は評価に値する。

さらには、それを基盤として、先行研究で混在していた再生課題と再認課題を体系的に整理し、それぞれの測定課題を独自に開発して、再生、再認の両面から等しく測定できるように考慮した点も工夫が見られる。

第二点は、上のような枠組みを用いてより詳細な課題を作成して、先行研究の再検証を実施したことである。先行研究では、スペリングの能力と他の言語技能との関連性は高くなく、したがってスペリング能力は独立した課題ないしテストを用いて測定する必要があるとされている。本研究はその観点を発展させ、スペリングに関連した様々な課題を作成し、その有効性について分析と検証を行った。特に、語彙知識の種類に加えて課題の種類という観点も設定することで、同じ能力を測定している再生課題と再認課題の結果にどのような相違点が見られるかに焦点を当てた点は優れている。本研究で扱った調査方法は、先行研究では解決されていなかった語彙知識における詳細な側面を測定するために有効であったと考えられる。

第三に、含意尺度法という分析手法を当該分野に導入し、量的な観点からだけでなく、質的な観点からのアプローチも試みて、単語のどのような側面が再認や再生を行う際に難しいのか、スペリング課題の階層性を明らかにしようとしている点も先行研究にはなかった新しい視点である。繰り返し修正を重ねながら関連する研究を遂行し、スペリング課題の難易度を推定して一定の結論を導いたことは、スペリングの習得研究に貢献するもので、高く評価できる。

第四に、検証の過程で最終的に100語の単語を対象とすることで、基本的なスペリング（文字）を網羅し、スペリング習得の全体像をとらえようとしている点は、先行研究に比して優れている点である。

一方未解決の問題としては、次の点を指摘することができるであろう。まず被験者が主に大学生であったことを考慮すると、たとえば中学生と比較した場合、課題（テスト）の結果や難易の状況が異なる可能性も否定できない。したがって本研究で得られた結論がどの程度一般化できるのかについては、語彙サイズという観点だけでなく、他の観点も取り入れて、より多様な学習者について検証を行う必要があると考えられる。特に全般的に再認課題の得点が高い傾向が見られたのは、繰り返し同じような課題を行うことによる「反復効果」も考えられ、それが大学生の場合により強く反映されたためかもしれない。

次に、本研究が最終的にスペリング能力測定のための目標基準準拠テストの開発を目指しているとなれば、課題を難易度によって尺度上に並べるためには明確な合格基準が必要になるはずである。しかしながら、本論文ではその点についての記述がやや不足しており、さらなる考察が望まれる。

第三に、本論文では検証対象としてほとんどの母音、子音がカバーできたとされているが、同じスペリングでも別の単語に組み込まれている場合や、発音が異なる場合などはやはり結果に影響が出る可能性がある。本研究の成果をさらに強固にするためには、調査対象となる単語の特性に留意し、より適切な単語をより多く選出して調査する必要があると考えられる。

平成26年6月2日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。なお、学力の確認は、著者が「人文社会科学研究科論文審査等実施細則」第10条(1)に該当することから免除し、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

よって著者は、博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。